

越境する 香川秀太 × 青山征彦 編 対話と学び



異質な人・組織・
コミュニティをつなぐ

異質な人々の交流が生む創造！

企業、医療・看護、教育、アート、職場外の学習コミュニティ、社会運動……

さまざまなフィールドで、既存の組織・集団のワクを越えた変革と創造が求められている。

「越境」という共通のテーマをもとに多様な領域で試みられた、ユニークな実践事例、

調査、理論的検討から、越境の可能性と困難を描き出す「越境論」への招待。

越境する対話と学び

異質な人・組織・コミュニティをつなぐ

香川秀太 × 青山征彦 編

目 次

序 異質なコミュニティをまたぐ、つなぐ	1
第Ⅰ部 理論・導入編	17～81
第1章 越境と活動理論のことはじめ	青山征彦 19
第2章 「越境的な対話と学び」とは何か — プロセス, 実践方法, 理論	香川秀太 35
第3章 経営組織における水平的学習への越境論アプローチ	長岡 健 65
第Ⅱ部 医療・看護に見る越境	83～158
第4章 医療と芸術が混淆する新しい創造的活動 — 病院の集団や組織が変わる, 変える, その仕組み	山口 (中上) 悦子 85
第5章 業務電子化が引き起こす疑似越境とその修復 — 電子カルテ障害カンファレンスの縦断分析 原田悦子・日根恭子・南部美砂子・須藤智	109
第6章 看護教育と臨床実践をつなぐ知識創造コミュニティ — 看護エデュケア研究会の取り組み 香川秀太・澁谷幸・鈴木ひとみ	137
第Ⅲ部 企業にみる越境	159～212
第7章 越境を促進・調停する媒介者とツール — 日立製作所の製品開発の事例	臼井 東 161

第8章	アルバイトから社員まで：全員参加のベストプラクティス創出	
	— A社における越境改革	内橋洋美 177
第9章	コミュニティメンバーと共に変容を続ける人材育成マネジメント研究会	堤 宇一 193

第Ⅳ部 アートとデザインに見る越境 213 ~ 290

第10章	デザインにおける越境をめぐって	小池星多・青山征彦 215
	— ロボットをデザインしたのは誰か	
第11章	学校のミシン実習と学校外のヨット実習の分析	
	— 越境する眼差し	會津律治・有元典文・尾出由佳 233
第12章	密猟されるオープンソースとしての「共通言語」	石田喜美 253
	— 「Tokyo Art Research Lab」における実践のデザイン	
第13章	越境する現代音楽	諏訪晃一 273
	— 「1000人で音楽をする日。」の事例から	

第Ⅴ部 ゆるやかなネットワークに見る越境 291 ~ 369

第14章	墨東大学の実践	岡部大介・加藤文俊・木村健世 293
	— 「学習の常識」に揺さぶりをかける	
第15章	矛盾がダンスする反原発デモ（前篇）	香川秀太 309
	— マルチチュードと野火的活動	
第16章	矛盾がダンスする反原発デモ（後篇）	香川秀太 337
	— アルチュセールの重層的決定論によせて	

文献		371
索引		389

序 異質なコミュニティをまたぐ、つなぐ

1. 文脈間、コミュニティ間のギャップ

以下は、いずれも実話に基づく事例である。

【事例1】

とあるセミナーの最後に、講師が次のように話し、その場を締めた。

「ここでの内容を職場でぜひご活用ください。」

「何か持ち帰っていただけますと幸いです。」

だが、実際は、セミナーが終わると多くの人が実践に移すことはなく、セミナーがあったことさえ、次第に忘れていった。

【事例2】

新入社員たちの仕事ぶりに対して、先輩や上司が口をそろえて次のように言う。

「最近の新人は危機感や忍耐力がない。」

「指示待ちで困る。言われたことしかやらない。」

他方、新入社員は思う。

「放任状態で何をやっていいのかわからない。」

「以前、自分で工夫してやってみたが、やり方が違う、勝手なことやるなど怒られた。それ以来、下手に自分から動くのはやめた。」

【事例3】

ある企業で幹部が決めた新しい方針が下りてきた。そして現場の人たちは次のように思った。

「また、現場の実情にそぐわない方針がきた。でも下手に意見して目立つのはよそう。どうせ意見してもほとんど採用されないし。」

「結局、何か問題が起きて泥をかぶるのは現場。」

「まあ、上の言うことを聞いときゃいいか。」

他方、幹部は、反発する現場の人間に対してこう思う。

「現場は変化を嫌っているだけ。変革が必要だ。」

「下は自分たちのせまい目線や都合で文句ばかり言っている。全体も見えていな

い。」

【事例4】

大学と地域とが連携して行くある地域活性化プロジェクトが試みられた。しかし、次第にお互い、次のように思うようになった。

「最初はやってみましょうと友好的なムードだった。こちらは頑張ってきたつもりだが、いまや相手の表情が硬い。」

これらは、各々違うフィールドで生じている事例であり、問題の種類も別物だが、次の点で共通している。いずれも、異なる場面や集合体^[1]の間で生じる乖離やギャップ、つまり、異なる文脈ないしコミュニティ間の乗り越え難い境界に関する事柄である。こうした類の諸問題を、さしあたり境界問題と呼ぼう^[2]。

事例1は、研修やセミナー状況から現場状況へ移る過程で生じる、教育と実践の間の境界である。こうした乖離は、セミナーや研修だけでなく、学校や大学等の教育現場と、実社会や職場との間の「知識（学習）転移」の困難として、心理学で言及されてきた現象である。事例2は、新人と古参集団の間の境界であり、能力観や互いのコミュニケーションパターンに関係する。事例3は、現場と上層部との間の立場や視点や権力差から生まれる境界であり、組織の意思決定方法がこの背景にある。事例4は、組織間、集団間の連携に伴って生じる境界であり、当初、越境しようとはしていたわけだが、いざ作業を始めると逆に互いの境界が可視化され関係が悪化したという事例である。これに限らず、異なる専門家間、企業間、大学と地域や企業との間で、連携やコラボという建前で始めたはいいが、いざやってみると生じる困難に関係する。

これらの事例以外にも、人間社会においてさまざまな境界問題が生じている。たとえば、ユーザーが求めるものとデザイナーがつくるものとのズレ、部署や職能部門間のすれ違い、派閥間の闘争、領土や国境をめぐる争い等、さまざまな種類の境

[1] 本書の序や第2章では、「人びと（やモノ）の集まり」を表現する用語として、組織、コミュニティ、集団、状況、文脈といった用語を用いている。基本的には、組織というとき、企業や学校といった制度的で公的な集団を指すかたちで、コミュニティや集団（集合体）というとき、組織そのものや、組織内の部署や部門、非公式的な活動や小規模な集まり等、大小さまざまな集まりを指すかたちで広く用いる。状況や文脈は、コミュニティと同様広い意味で、人びとやモノが集まり何らかの活動を行う場面や過程を意味する言葉として使用する。

[2] 「問題とは何か」は、実はそれ自体複雑な問いである（本書2章参照）。

界問題があちこちで発生している。悩ましいのは、私たちは自集団に独自の文化を培ったり、集団内の結束を高めたりする必要がある一方で、気づけばそれが他集団との境界を顕在的、潜在的に強化してしまうという矛盾を抱えてしまっている点である。また、集団間で設けたコミュニケーションの機会が、逆にますます境界を強めていく場合さえあるのも、境界問題をいっそう難問にする。

これに対し、昨今、越境的な対話や学習（以下、越境的対話）がますます求められるようになってきている。越境的対話とは、異なるコミュニティの人びとが出会い、交流し、互いの重なりや共有部分を創出する一方で、文化的、歴史的に生じた互いの差異を単純に解消すべき悪者とするのではなく、むしろ変化の重要な原動力として生かす実践である。越境的対話は、相互に揺さぶり、既存のコミュニティ間の関係を崩し新しい人と人、人とモノのつながり方を模索し、各コミュニティが独自に育ててきたさまざまな文化的資源を交換しあい、それらの新たな活用方法を探り、新しい知識、価値、経験、コンセプト、システム、イベント等を創造していく試みである^[3]。

越境過程では、新たな諸資源やコミュニティ間関係の創造だけでなく、主体の変容も同時に起こる。互いにとっての異文化に触れあうことで、個々人のそれまでの振る舞いや「これが当たり前」という思い込みを自覚化・相対化し、互いに揺さぶりあい、崩し、硬直した集団文化に変化の余地を生み出す。また、人びとは、単に機械的、合理的に何かを生産するのではなく、新しい情動も経験する。たとえば、興奮、没入、創造の喜びといった情動を相互に生産し交換し変容させる。越境的対話を通して、自集団や他集団への関わり方、考え方、視点、思いや感情が、つまり主体の振る舞い方が、（時に驚くほど根本的な）変化を遂げる。

このように越境的対話は、人と人、人とモノ、コミュニティとコミュニティとの間の新しい関係性やコミュニケーションの方法、そして新しい主体性や情動性を創造する過程である。ただ一人の個人の、ある側面のみが、あるいはただ一つのコミュニティが変化するのではなく、「コミュニティ間の全人的な発達」の過程である。

それでは、具体的にどういった越境の方法がありうるのか、どのようにそれを創造していけばよいのか、越境の過程や内部では実際に何が起きているのか、そこにどういった理論的、実践的な価値や意味を見出すことが可能か、課題は何か。これらに答えていく必要がある。本書で問いかけ議論したいのは、こうした点である。

[3] 越境的な学びとは社外学習のことだと理解されている読者がおられるかもしれない。しかし本書で言う越境的な学びとは、社外学習に限定されない。それも一例としては含むが、本書で言う越境は、マルクスやヴィゴツキーの思想に基づき発展した活動理論に主に依拠するもので、より根源的で広い意味を持つ（詳細は本書の第1章を参照）。

さて、冒頭の事例1で言えば、セミナーないし研修での学習が現場にまで活用されないのは、受講者が十分に知識を習得できていなかったことや意識の低さによるものだろうか。あるいは、教育する側の問題、つまり研修の教授設計のあり方や教授技術、受講者に提供する満足度の問題だろうか。これらにアプローチするのが従来の教授論的な発想とすれば、本書2章や6章で論じるように、越境的対話論では違った方法をとる。実際、研修の教授や評価方法を改善しても、現場への知の転移に容易には結びつかないこと、あるいは転移を実現することの難しさは、従来の研究からも繰り返し指摘されてきた（たとえば、Østerlund, 1996; 堤, 2012）。転移の壁という境界問題を乗り越えるには別のアプローチが求められている。

また、事例2では、新人の行為を、先輩や上司が「主体性や忍耐力の欠如」という、新人の内的な能力や意識の問題に単純に帰属してしまっている。事例3の幹部と現場の境界や、事例4の組織間の境界は、自集団の文化を知らず知らずのうちに当然視した上で、両者共に、自らの基準をもとに相手側に問題の原因を帰属させる思考パターンに由来する^[4]。事例3ではこれに加えて、一方が方針を決定し他方がそれを受けるという組織内のコミュニケーションパターンが固定化し、それを自覚し反省を加える機会が設けられていないことが背景の一つにあげられるだろう。越境的対話の実践は、しばしば陥りがちなこれら他所や個人の能力・努力への単純な原因帰属から、人びとの現実の複雑な相互行為や関係性に焦点を移行させ、それまでのコミュニケーションのあり方に変化を起し、人・モノ・集団間の関係性の再構築を試みる。

2. 越境への関心の拡がり

越境的対話は、決して真新しい実践ではない。社会で試みられてきた無数の実践には、これに相当するものが数多くある。また、焦点はさまざまではあるが、越境に関連する学術的議論は、特に90年代から、経営組織論、心理学、教育学、言語教育、哲学等の複数の分野で盛んになってきた（たとえば、Engeström et al., 1995; 今村, 1997; Kramsch, 1993; Nonaka & Takeuchi, 1996; Senge, 1990, Wenger, 1990）。そして、昨今、越境へのフォーカスが、ますます盛り上がりを見せている。

たとえば、社会変動が激しく、しきりにイノベーションが叫ばれる現代社会において、組織や部門や専門性や職能間の境界を越え、異なる声を共振させて組織変革や知識創造を引き起こしていく必要性が、経営学や組織論といった領域で、いっそ

[4] センゲ（Senge, 1990, p.59）が言う「悪いのはあちら」症候群に相当。

う声高に主張されるようになってきている。また、転職や新事業の立ち上げ、職場外のワークショップや勉強会への参加等、特定の組織や集団に定着せず、ある共通の関心やテーマをもとに、多様な人びとが公的、非公式的につながり、多種の文脈を横断しながら生きる生き方がより市民権を得てきている。教育学では、キャリア教育の重要性が叫ばれ、学校や大学等の教育機関と企業や地域との連携やひらかれた学校の試み等がますます活発に議論されるようになってきた。言語教育においては、いわゆる語学の学習だけでなく、文化的ギャップにいかに関わり全人格的にどう変化していくのかが関心であり続け、グローバル化に伴いこの議論の重要性はさらに増している。心理学では、従来の実験研究が中心であった学習転移論への批判から、実際の生きたフィールドに関心を寄せる状況的学習論が提唱され、単一のコミュニティでの学習過程から複数のコミュニティをまたいだ学習過程の研究へと関心が拡張している。

そして、これらの「根っこ」にあたる理論的基盤を探る試みも行われ、スピノザ、マルクス、ヴィゴツキー等の優れた古典的思想が改めて着目され、その可能性を引き出す努力が行われている。実際、関与の程度や質はさまざまではあるが、これらの共通の思想的血統によって本書の各章はつながりあっている。

このように、越境的対話は多岐の領域にわたるテーマであり、その関心や議論は昨今ますます活発化している。つまり、越境には、多種の領域をコミュニケーションさせ、多様な知見を結びつけていく「共的な概念」としての力があり、逆に、多種の領域での各々の試みを通して、越境の理論や実践はさらに深化・拡張し、多様なかたちへと派生・展開していく。すなわち、一方で、越境に関する総合的議論が、他方でさらなる多様化が求められている。

本書では、そのような関心から、企業、医療、アート、職場外の学習コミュニティ、社会運動等、さまざまなフィールドで試みられた、ユニークな越境に関する実践事例や調査、そして理論的議論を集めた。執筆陣も、企業人から心理学者、経営学者、教育学者、医学者、看護学者まで多岐にわたる。一見するとまとまりに欠けるように受け止められるかもしれないが、これはむしろ、越境がカバーする事柄の広さや、現実のフィールドに関心を持つ学問の、あるいは学問と実社会との、昨今の新しい結びつきを反映したものと考えている。

いまや心理学者、教育学者、経営学者、哲学者、社会学者、看護学者、医学者等の多様な領域の研究者が、ますます生きたフィールドを調査するようになり、その変革やデザインにも積極的に関わるようになってきている。他方、実践現場では、勘や経験に頼った実践の限界を乗り越えるべく、理論や調査のニーズが増え、大学院で専門的知識を学び直そうという社会人も珍しくない。現に異領域の研究者や実践家

との出会いや交流の機会が増え、(理解の深度や定義に差はあれども) 質的研究, コミュニティ, 対話, イノベーション, ワークショップといった用語が共通の概念や関心として飛び交ったりする。フィールドが結節点となり, 異分野の交わりが当たり前になりつつあるのだ。しかし他方で, まったく融合はせず, あえて境界を引き, 各領域に固有の歴史性を生かすことは, 領域独自の視点や知識を育てる。そうして再び, 育った知見が領域間の境界を越えて交換されることで, 新たなアプローチの発掘が相互に刺激され, 同時にさらなる差異や多様性もまた生まれていく。現在, 私たちは, 学問間や, 実社会と研究者との間の関係性の再編や変革のまっただ中にある。いわば, おそろしく広大な探求のステージに立ってしまっている! もはやスローガンとしての「学際」は否応なく意味を失いつつあるといえるだろう。

いうなれば, 本書は, 異なる領域の人間が「越境」という共通のテーマをもとに集まると同時に, 各々が多様な表現モードを用いて独自の議論を展開し越境への多様なアプローチを探っていく, 実験的な越境的対話の場と言えるかもしれない。この対話のゲームにぜひ読者の皆様も参加していただきたい。

3. 多種の越境

本書の構成について説明する。

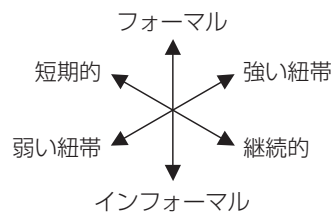
まず, 第I部「理論・導入編」では, 「越境とは何か」について, 全体の軸となる基礎的な知識や理論枠組みを提供する。第II部以降は, 医療・看護, 企業, アート・デザイン, そしてゆるやかなネットワークにおける, さまざまな越境的な取り組みの実践例や, 越境過程に関する調査研究が収められている。

本書の事例を分類すると, 第一に, 公的な組織内部にある, 部署や職能部門間の越境的な変革や取り組み(組織内の職能部門間越境), 第二に, 芸術活動と医療活動間の協働などの, 異なる組織や分野間が協働して新しい組織や労働や学習のあり方を創造していく取り組み(異組織・異分野間の越境), 第三に, 異なる組織に所属する人びとが, 普段の仕事とは別の時間にインフォーマルに, しかし, たとえば, 人材育成といった共通かつ日頃の仕事に比較的關係の強いテーマのもと, 集まり学びあうコミュニティづくり(インフォーマルな越境コミュニティ), そして第四に, 仮想の大学, 反原発デモ, アートプロジェクトといった, 日頃の仕事とは別に, 遊びや祝祭も志向しつつ, 比較的ゆるやかにつながるネットワーク活動が分析的に論じられている。

参考までに, 図序-1に, 越境の種類を把握するための大まかな枠組みを示した。

ただし, これはあくまで単純化である。実際には, ただ1つの地点に固定される

ものではなく、越境のタイプはむしろ時間とともに変化したり（たとえば、当初非公式的だった集まりから、より公的で継続的な取り組みに変化する場合）、公的なものと非公式的なものが重なったり、複数の越境実践が重層的に同時進行したり、あるいはフォーマルとインフォーマルとの間に位置する活動など、より曖昧な越境実践が生じたりすることも想定する必要がある。こうした「越境の複雑さやダイナミクス」もまた、研究の対象となりうるのである。



図序-1 越境的なつながりの種類

4. 流動的な拡集ネットワーク

最後にあげた、流動的なつながりについてはもう少し説明を加えておきたい。

昨今、参加型ワークショップ（アート体験、地域振興、キャリアの振り返り等）、特定の団体のみによらない社会運動、束の間の祝祭的なフラッシュモブ、音楽やコスプレや創作活動等、人びとが日頃所属する組織の枠組みを越えて、あるいは所属組織とは無関係に、自主的につながり集まる活動が盛んになってきている。

こうした活動もきわめて多様だが、あえてまとめてみよう。それは、日頃別々に活動しているさまざまな分野の人間が、束の間にネット上あるいは現実の場で、コミュニティやイベントを形成したり参加したりし、そこで新たなつながりをつくるがまた分散していく実践である。ある程度共通のテーマで、しかし弱い関係を形成し、個人がかなり多様な関心や動機で、しばしば日頃の労働とは離れたところで、時に趣味や娯楽に近いかたちで自主的に参加する。そこでは、知識交換、感性の刺激、快楽や苦勞の一時的共有、協働的な想起や思考、諸資源の交換や創造が行われる。束の間に集まり解散したきりになることもあれば、そこでゆるいながらも人脈を形成し、ある時また別の集まりを形成することもある。拡大（拡散）・縮小（解散）、分散・集中を繰り返しながら、変容していく流動的なつながりであり、さしあたりここでは拡集的ネットワーク（以下、拡集）と呼ぼう^[5]。

[5] 学習論者エンゲストロムは、ネットワークという語を、「中心のある安定的なつながり」を意味する概念として、狭義の定義付けをしこれに対比させ「ノットワーキング」という概念を提案している（第1章参照）ただし、ここでは、ネットワークを中心の定まらない不安定なつながりも含む語としてより広義に用いる。なお、ノットワー

拡集は、旧来の組織労働^[6]とちょうど逆の特徴を持つ——例として、工場労働やファーストフード店、あるいは中央集権型組織を想像されたい。旧来の組織の中では労働者は、組織が用意する生産手段を用い、決められた諸規則や方針や諸制度からしばしば弱くはない制約を受け、所定の商品を生産し販売することで経済的利益を得る。つまり組織が用意し貸与する生産諸手段や諸制度に従い消費する側に回る。対して拡集では、生産の道具や生産物——必ずしも形あるモノではなく、知識や情動、あるいはコミュニケーション機会やネットワーク形成それ自体も含む——を自ら選択あるいは生み出し、日頃とは違う自分や情動を生成すること、人・モノ・社会との関係性を作り出すこと、そして、しばしば経済的成果よりもこれらのプロセスを体験すること自体が主たる動機となる。

拡集的な活動は、これまでは、日頃の組織労働では実現が難しい、現代人の欲望を補完する役割を担う等、脇役の地位に置かれがちだった。ところが昨今の情報技術の進化、雇用の流動化、草の根の活動の拡がり、大企業の衰退と労働力のグローバルな分散化等から、いっそう力を持ち労働形態を変革させつつある。たとえば、情報技術の普及と発展により、マスメディアや特定の組織が占有していた生産手段や交換・分配手段が、誰もが日常の個人レベルで比較的自由に利用できる機会がますます拡大している。中高生でさえ、自ら新たなアプリやコンテンツを生産し、交換や分配を行う労働ゲームに参加でき、事実そうした事例が現れてきている。

組織労働の内部からも、先鋭的でフレキシブルな労働形態、在宅労働、知識創造機会の分散等が普及していくと、拡集の特徴との共通点が増えていく。つまり、組織労働の形態と、その外部にあった活動の特徴とが互いに接近し、両者の境界が曖昧化していく。拡集の形態が徐々に感染・拡大し、従来の組織労働のあり方が内側からも崩れ変容する^[7]。

こうした動向は、特定の組織への所属を前提とした従来の生活や人生や社会の

キングは、組織労働や公的な仕事絡みの実践を指すのにもかなりの程度使用されている。

[6] 比較を明快にするため、ここでの旧来の組織労働とは、主に中央集権的組織や工場労働をモデルにしている。

[7] ただし、中央集権組織や工場労働のような形態は、情報技術の拡がりや発展が起こるからといって、そう単純に捨て去られはしない。たとえばアマゾンのような一見現代的な企業でさえ、発送作業を行う倉庫の作業員は、組織から与えられる端末機を用いた、会話すらない歯車のな工場労働に従事する（2013年7月15日朝日新聞5面）。

あり方を、じっくりと、しかし大きく底から変動させつつあることを示す^[8]。組織への参加を軸にした社会から、拡集ネットワークをさまよいながら生きる社会へと、徐々に根本的転換が起こりつつあると言えるかもしれない——ただし、第16章で触れるが、従来の組織タイプと拡集ネットワークは、実際には葛藤や抵抗関係も含めて、分かれ難く絡み合い、相互に形成しあう関係にある。

言い換えれば、多様な小コミュニティやつながりを形成しては分散し、また新たに形成し再び分散していくような、コミュニティ間の横断を続ける、越境を前提とした生き方や社会のあり方が、今後さらに模索されていくだろう。

拡集は、集団という枠組み自体変えていく。たとえば、いわゆるアノニマスやネットウヨ等、どこに彼らが「いる」のか、集団の境界（外縁）は必ずしも定かでない。現代社会における、「戦うべき相手としてのテロ」もまた、必ずしも特定の国家や共同体に相当するものではなく、分散的に出現し、いつどこで誰にその芽が現れるか、それに相当するものとなるか明確化できない、むしろ抽象的な概念や実践である（Hardt & Negri, 2004）。該当する何か活動が現れた時、その集団カテゴリーにしばしば事後的に参加する（含められる）ことになる。

以上から、第一に、拡集ネットワークの広まりとは、越境が特別な事態ではなく、むしろ、越境を前提にした生き方の拡大を意味する。第二に、従来のように、円や四角形で表現されるような、境界線が画定しやすい集団ではなく、むしろ、集団としての境界線（外縁）が、そもそも設定し難く、より捉え難くなっていくことを意味する。これらは実は、**越境という言葉を用いる必要性や妥当性そのものに、もはや、疑問を抱かせることにもなっていく。**

拡集とは、特定の集団に深く参加し、その集団の内側に閉じていくことを前提とするのではなく、むしろ、逆に、境界を解放し、さまざまな人びととのつながりを拡げていくことを前提としているから、それは当然のことかもしれない。境界をつくり閉じる実践があれば、境界や越境に言及する意味があるが、そもそも多様な人びとと次々につながっていくオープンな志向性を持つ動きが前提となれば、集団やコミュニティという塊の区分や、境界それ自体が、言及に値しないものになりえる^[9]。

[8] ハート&ネグリ（Hardt & Negri, 2004）は、グローバル経済において、労働者階級はもはや主導的役割を果たしていないとさえ主張する。

[9] 実際、境界そのものがない世界になる（佐々木, 2013）とか、境界の減退（Engeström, 2009）という議論がある。ただし、そう簡単かつ単純に、「拡集型＝境界がゆるやか」とラベリングすることには慎重になる必要があるだろう。たとえば、ネットでの他国批判やナショナリズム高揚に見られるように、ゆるやかなつながりを用いて、むしろ

すなわち、越境概念さえも自明視せず、その概念を利用しつつも、時にそれを批判的に検討していくことが、現在の社会のあり方を捉え、未来のそれを考えるのに必要だろう。

このように、比較的境界の明確なコミュニティや集団間の越境実践の一方で、日頃の組織労働とは関係が弱いところで、あるいは補完するかたちで、さらには従来の組織労働形態をしのぎ破壊し再編すらかちで、異質な人びとが流動的につながっていく、新しい越境実践やネットワーク活動が活発化してきている。

5. 「喜び」としての「学び」

以上を含め、第Ⅱ部以降の実践事例編では、さまざまな形態の越境的な取り組みを取り上げ、読者の実践活動や研究活動を刺激すると同時に、越境の対話や学びを理論的に考えていく素材を提供したいと考えている。

これには、従来の学習観からの転換が含まれる。

本書で示す個々の実践事例は、ローカルで小規模かもしれない。しかし、問題に虐げられ愚痴に終始する、あるいは目の不快や不快回避を求める受動的主体から、人びとと手を携えて、自ら新しい人びと（あるいは人とモノ）の関係性をデザインしようという冒険に乗り出す能動的主体がさまざまなかたちで描かれている。これは、スピノザ（浅野、2006）が言う、活動力を増大させること、つまり、「喜び」という情動に基づく共同性に通じうる。

そもそも人は、組織やコミュニティのために生きているのではない。つまり、国家や組織や共同体のために人が存在するのではない——しかしそうした活動が我々の社会を跋扈している。むしろ、人が活動力を増大させるために、つまり「喜び」を味わうために、コミュニティはつくられなければならない。「喜び」を疎外する制度や法やシステムを抱えるようになってしまったコミュニティあるいは社会は、ほかならぬ私たちの手で、作り変えていかなければならないだろう。私たちがもし無力と感じるならば、それは、私たち自身が無意識的につくりあってしまっている、構成された感情である。つくられた無力さを乗り越える、この能動的な試み自体が、喜びの拡大につながっていく。

それは、どういう方向に進むのか、何がこれから起こるか不確定だが、しかしそれゆえ、わくわくする活動である。映画やドラマでも、先の展開が読めてしまってい

境界を積極的に築いていく実践もある。拡集においてどう境界を捉えるかについては、本書の第15, 16章の議論を参照されたい。

るものはつまらない。目標が決められ、プランも内容も決まり、着地も決定しているものは、安定は得られるかもしれないが、面白さが激減する。これに対し、コミュニティの変革とデザインとは、むしろ諸制約はあるものの、既存の固定した枠組みをブレイクスルーし、そもそも着地点などない未来を自らが創造していくのである。

これは「喜びとしての学び」と言い換えられるだろう。学習というと一般的に、「知識や技術を頭や身体の中に取り入れること」という内面化論に基づく学習観や、「こうあるべき」という型に即した振る舞いができるようになることなどの、形式主義、官僚主義に浸食された学習観をイメージしてしまうことが少なくない。私たちは、「学習とはこういうものだ」という学習観自体を学んでしまっている。しかし、本書で描きたい学びとは、そうした類の学習からのむしろ脱却である。

すなわち、平明で単純だが表面的な魅力にとどまるものを越えて、曖昧で複雑だがもっと本質的なものに気づいていくこと、それを探究しつつ、自ら組織やコミュニティをつくり変えていくこと、一見無意味な体験をあえてすること、それまでの思い込みや自明性から自らを解放すること、思ってもみなかった新しい自分（になりつつあること）を体験すること、新しい知識や情動やツールやイベントを人びととともに生み出していくこと、組織やコミュニティや文化の壁を越えて異質な人びとや実践と出会うこと、人と人、人とモノとの新しいつながりやコミュニケーションの機会を創造することである。

「そんなものが“学習”なのか」と疑問を持つ人もいるかもしれない。しかし、こうした経験を経て、これこそ学びだと気づいている人は、いわゆる知識や技術の習得は主役ではなく、むしろ「喜びの学び」の手段であり、それに従属することを深く知っている。未来は知らぬが、喜びは知っているのである。

言い換えれば、我々は「教わり学ぶ」という根深い発想から離れる必要がある。現代はますます教育が産業化し、授業評価に代表されるように、よりわかりやすくより容易に頭に入り短期的な満足度が得られる教育が要求される。これを産業化した飲食活動で喩えてみよう。今日、食料品は他が生産し簡単に購入可能であり、供給する側は、より消費者が満足する商品やサービスに工夫を凝らす。そして我々は食本来の喜びを忘れる。しかし、サバイバル漫画でも描かれるように、人は食糧が容易に入手できない原始的状況に追い込まれたとき、自ら狩猟や採取を試みざるを得なくなり、食のありがたみや生の喜びを実感する。これと同様に、学べとお尻を叩かれ、口に含み（頭に入り）やすく他から知識が提供される環境ではなく、複雑で曖昧で面倒な現実の環境に向き合い格闘し、手探りの実践を試みることは、単なる点取り屋ではない知的欲求の芽生えや、知識本来のありがたみの実感を促しうる。“野生の食”ならぬ“野生の学習”感覚が失われがちで、なぜかますますその喪失を助

長させている現代であるがゆえに、「野生の学習感覚を再学習（回復）する」機会が、重要になるのではなからうか。

このように、私たちは、既存の「学習」に基づく考えや実践から、「喜びの学び」に基づく実践への転換を試みていかななくてはならない^[10]。

「喜びの学び」は即興の過程でもある。ここで言う即興とは、単にその場で演じる機転の利いた行為やパフォーマンスでも、即興力のような個人の器用な能力のことでもない。むしろ、即興とは、不器用だろうが詰まろうが失敗しようが、未来（歴史）を創造していく過程である。即興を売りとするジャズの魅力は、新しいスタイルやフレーズを苦悩しつつ探求してきた個々の演奏者の歴史性、各演奏者の独特の癖やピッチやリズム、個々のオーディエンスの歴史性や曲への思い、それらが会場で出会い、複数の情動が複雑に絡み合い、実験的に演奏が行われていくスリルと楽しさの中で——異質な歴史性が交わりぶつかりあう中で——、そのつど生み出されるものである。すぐれた演奏は、奥行き、深み、味わいが感じられることだろう。

いまだ不明で“曖昧さ”という発展可能性をもつ越境について考え、実践の意味をより深く探っていくには、越境以外の諸概念にも触れる必要がある。本書では、たとえば、学習、境界、矛盾、デザイン、ネットワーク、協働等々の諸概念について理論的な検討が行われる。理論（的思考）は、普段、何気なくスルーしてしまう空気のように自明な事柄にあえて目を向けさせ、そもそもそれは何なのか、どう捉えるべきか自覚し考えるための、あるいは、理念なきデザインを避けるための、そして別の考え方や見方に気付かせてくれる重要な道具である。また、一見無関係な異なるフィールドや領域の間を結びつける重要な共的媒体でもある。私たちは、そのさらなる鍛錬ないし拡張、そして新概念の創造を試みていく必要がある。

* * *

各章を紹介する。第I部の理論・導入編は全3章からなる。第1章では、最初の準備運動として、越境概念のもともとの意味やその背景理論となっている活動理論

[10] この過程には、次の2つのアンラーン（荊宿ほか、2012）が含まれるだろう。1つは、経験を通していったん習得した振る舞い方や思い込みの解体と組み替えとしての脱学習（実践レベルの脱学習）、もう1つは、「学習とは与えられた知識を得ることだ」という既存の認識論からの脱却と組み替えとしてのメタ的な脱学習である（認識論レベルの脱学習）。後者ももちろん、日頃の実践を通して学ぶ点では、前者の一部と言えるが、前者の解体が起こることが、後者の認識論の解体にまでつながるとは限らない。

とその諸研究について概説する。本書は各章独立のため基本的にどれから読んでいただいてもかまわないが、まず第1章をお読みいただくことで、本書の背景や研究の動向を掴むのに役立つだろう。第2章では、越境過程でいったい人びとやコミュニティに何が起るか、コミュニティの変革を引き起こす越境の方法や仕掛けとは何か、その根っことなる学習論をどう捉えるかを解説する。第Ⅱ部以降の事例を理解し考えるのにも役立つよう、越境のポイントをまとめた。逆に、この分野に馴染みがない方は、Ⅱ部以降のいずれかの事例を読まれた後の方が内容がより理解しやすいかも知れない。第3章では、経営学の立場から越境を論じる。経営的文脈では、従来、垂直的学習、すなわち熟達学習と見なされてきたが、めまぐるしく変化する昨今のビジネス環境においてはむしろ、新しい規範を組織に持ち込み、組織の命令や統制を崩すような異端的存在、すなわち、水平的学習者が鍵を握ると論じる。経営学の立場から、越境概念の潜在力が引き出されるだろう。

第Ⅱ部では、医療・看護における越境実践を示す。

第4章では、病院で発生していた、“どうせうまくいかない病”や、“部署内や組織内の人間だけで何とかしなければ症候群”という組織病を治療するために、芸術家や教師という外部者を招き入れ、医療活動の前提を崩し拡張する実践が示される。他方、伝統的な組織の特徴が活用もされる。外部者や異文化との協働により組織変革を起こす実践上のヒントが多く提供される。

第5章では、新しい情報システムが導入される過程で、病院側の医師と、システム開発側のベンダー SE との間で生じた境界を乗り越えるべく設けられた会合での、詳細な会話データが分析される。その結果、むしろその会合では、さまざまな境界が新たに生まれ、システム改善を困難にさせていることが示される。越境の困難性をデータや調査から示し、越境の場を設計・運用する際の注意点や、その改善策に関する示唆を得ることができる。

第6章では、かねて看護教育を悩ませてきた「教育と実践現場との境界」を乗り越えるアイデアを創造する、非公式な学習コミュニティの取り組みを報告する。学内で看護学生が学んだにもかかわらず現場に出てフリーズする問題や、セミナーで得た知識を教育現場の改善に実際に活用することの困難性、つまり転移の壁にチャレンジする。そして、従来の慣習的な教育方法とは異なる方法を、学習コミュニティの力で創造する過程が報告される。

第Ⅲ部では、企業における3つの越境的な取り組みを示す。

第7章では、日立製作所デザイン本部における越境的な実践を示す。デザイン本部では、システム開発の際、開発部門とユーザーに近い立場の部門だけでなく、別の第三の部門が参加する。このような仲介者をはさんだ越境過程が、実際の会話事例

を用いて具体的に示され分析される。また、異メンバー間の知識の共有を助け、対話を促進するべく開発された独自のツールも報告される。越境を促す仲介者やツールづくりの重要性に気づかせてくれる。

第8章では、映画館経営会社で試みられた、支店間の境界を横断するプロジェクトが報告される。従来のトップダウン的で画一的な体制から、全国の各支店が、独自の企画を創造・実施し、そのアイデアや結果を支店間で発表しあってさらに創造性を刺激しあう体制へと改革し、当初の赤字から黒字となった。他の組織やフィールドにもカスタマイズして運用可能な実践モデルを提供してくれよう。

第9章では、「人材育成」という共通のキーワードをもとに、多様な組織や立場の人間が集う、越境的な社外の学習コミュニティの開発過程が示される。このコミュニティは単なる勉強会ではなく、従来の企業の教育活動や文化に変革を起こすことを目指したコミュニティである。参加者を結びつける多様な仕掛けや、運営上の工夫点等の実践的なポイントが整理して示されており、学習コミュニティづくりに有用な知見を提供してくれるだろう。

第IV部では、アートとデザインにおける越境的な取り組みを論じる。

第10章では、人形型のロボットが幼稚園や小学校の現場に移入されるというユニークな事例が示される。そして、ユーザーとデザイナーの境界とは何か、デザインする主体とは誰かが問われ考察される。興味深いのは、ロボット自体はほとんど変わらないのに、周囲（の関係性）が次々に変化するのに伴い、ロボットの意味や役割が変わっていく点である。ユーザーとデザイナーの関係を検討する理論的、実践的素材が得られるだろう。

第11章では、学校的な教育活動と、学校外の実践活動とが混交する、ミシン実習とヨット教室という2事例が観察調査により比較分析される。昨今、実社会にひらかれた教育の重要性が叫ばれ、さまざまな外部の活動との協働や導入が試みられている。この時、単に学校外の活動を教室に移入すればよいのではなく、いかに学外の活動のリアリティを崩さずに教育活動として展開するか等の、学校教育と外部実践との関係を考えるのに有用な知見を提供してくれる。

第12章では、多様な組織や団体が協働するアートプロジェクトの展開を記述する。越境は、多様で異質な集団がつながる取り組みであるがゆえに、共通言語の存在が重要である。ここでは、オープンソースや参加者の言説資料を利用して、共通言語を創出していく試みと、そこで起こる新たな混乱が、セルトーの「密漁」の概念を用いて論じられる。越境の重要なポイントとなる、共通の媒体をいかに構築していくかに関する知見が得られるだろう。

第13章では、観客参加型のユニークな現代音楽の楽曲を、20年の時を越えて復元

する試みが論じられる。この実践は、同一の楽曲や実践を、ある時代や場所から別のそれらへ移送させる、「歴史的越境」の取り組みと言い換えられ、大澤真幸の「第三者の審級」論によりこの実践の意味が論考される。古いものを時代を超えて復元するとはどのような事柄なのか、社会学的な視点から検討が行われる。

最後の第V部では、ゆるやかなネットワークの実践事例を論じる。

第14章では、「墨東大学」という非公式の大学の取り組みが示される。墨東大学では、地域とゆるやかに関わりながら、アーティストや地域の職人や大学教員らとともに、明確な目的も習得すべき内容も曖昧な、講義とはもはや言えないような独特な講義が実施される。「知識の習得」という常識的な教育学習観を崩す、「脱学習のコミュニティ」づくりと言える取り組みだろう。

第15, 16章では、昨今の反原発デモに焦点を当て、その特徴を分析する。この作業を通して、昨今の拡集ネットワークをいかに捉えるか、その理論的ツールや分析方法論の捻出を試みる。ハートやネグリのマルチチュードや、ルイ・アルチュセールの矛盾の重層的決定論を用いて、従来の議論の乗り越えが図られ、ネットワーク、オブジェクト、境界、学習、矛盾に関する論考が行われる。フィールド研究や学習研究を、今後ますます社会に拡大していくであろう、拡集ネットワークに着目する研究の次元へと、いっそう展開させようという試みである。

各著者間で、越境への関心や取り組み方、語り方に共通点もあれば、相違点もある。繰り返しになるが、越境はいまだ不明の概念であり、共通点を探りつつも多様化させていくこと、つまり、越境を動的な概念と捉え、その意味を根本から深く考えていくと同時に発展、変容させ、時に崩す継続的試みこそが重要である。本書がそうしたひとつの対話の場になれば幸いである。

2015年4月20日

香川秀太・青山征彦